

GNU GPLv2 第3条 http://www.opensource.jp/gpl/gpl_ja.html

3. あなたは上記第1条および2条の条件に従い、**許諾条件1** (BSDライセンス) の『プログラム』 (あるいは第三者にける派生物) をオブジェクトコードないし実行形式で複製または頒布することができる。**許諾内容**

ただし、その場合あなたは以下のうちどれか1つを実施しなければならない

a) 著作物に、『プログラム』に対応した完全かつ機械で読み取り可能なソースコードを**添付する**。(中略) **「ソース公開」とは書いていない**

b) 著作物に、(中略) ソースコードを、(中略) 提供する旨述べた少なくとも3年間は有効な書面になった**申し出を添える**。(以下略) **許諾条件2**

この二つの行為を合わせて私は「ソース開示」と読んでいる。
ソース開示方法a)とb)のメリット/デメリットをご存じだろうか？

ソース開示方法によるメリット/デメリット

ソース開示方法	a)	b)
による違い	ソース添付	申し出添付
製品にソース格納媒体が	必要	不要
著作権表示・ライセンス	同梱済み	抽出要

※ソース開示方法b)申し出添付 が選択される理由の一つ？
1. コモディティ製品では、ソースCD一枚の部材増加は重い…

ソース開示方法b)申し出添付 のデメリット

1. 添付後3年間は、受付対応が必要

2. 第1条条件を別途満たす必要がある

1. それぞれの複製物において適切な**著作権表示**と**保証の否認声明**を目立つよう適切に掲載し、またこの許諾書および一切の保証の不在に触れた告知すべてをそのまま残し、そしてこの**許諾書**の複製物を『プログラム』のいかなる受領者にも『プログラム』と共に頒布する…

a) ソース添付ならば、ソース形式で「『プログラム』と共に頒布される」

ソース開示方法の違いを図示

a) ソース添付

b) 申し出添付

この『プログラム』の頒布は、**著作権表示と保証の否認声明**が表示、および『プログラム』と共に許諾書が頒布されていると言えるだろうか？

コミュニティの多くは容認

i. 「結局、入手できるから、いいじゃないか」 (容認する) と思っているかもしれない、

ii. **実は、(容認するつもりではなかったけど) 条文を読みこなしせていないだけかもしれない。**

b) 申し出添付

この『プログラム』の頒布は、**著作権表示と保証の否認声明**が表示、および『プログラム』と共に許諾書が頒布されていると言えるだろうか？

2007年、Skype社がGPL違反で提訴された事例

1. SMC社製IP電話をSkype社がWeb販売

2. GPL違反を認識し、一旦販売し停止

3. ソースがWebから入手可能の旨を述べた申し出を添付の上、販売再開

4. Harald Welte氏との裁判で**申し出**を添付したから起訴理由がなくなると主張

5. 判事が**ライセンス文(許諾書)**を付けなければならないと述べ、10万ユーロの賠償金(?)。販売差止の仮処分申立は棄却。

裁判になると条文通りに「『プログラム』と共に頒布」しないと危険(?)

許諾書等は『プログラム』と共に頒布がお勧め

a) 抽出可能ならば問題ない。

b) SDKとして提供されたLinuxディストリビューションから抽出するのは、なかなか大変。

抽出せずに「Ubuntu x.xが含まれます」の表現で済まされているケースが多。黙認されていると思われるが、もし突き詰められると根拠が弱い。

可能ならば、ソース添付がお勧め

a) ソース添付

• GPLで、添付方法は問われていない。

• バイナリと共に頒布されればよい。

※だから、バイナリがWeb DLで頒布されるなら、同様の方法でソースもWeb DLで、という選択肢があるのも同じこと。

さらに、ソース格納媒体を製品本体にする対処案

一般に、製品のソース添付する場合、CD/DVDなどの媒体に格納して媒体添付する、と思われるが、**そう、GNU GPLに書かれては、いない。**

製品本体のディスク/メモリ内に格納するメリット。

	バイナリソースコード	バイナリ
部材(原価)の増加	なし	あり
付属媒体の散逸の可能性	なし	あり

HW内ソースコードへのアクセス手段は、条件ではない

ソースコード開示が必要な理由を考えてほしい

自由ソフトウェアとは？ <https://www.gnu.org/philosophy/free-sw.html>

プログラムがどのように動作しているか研究し、必要に応じて改造する自由 (第一の自由)。

ソースコードへのアクセスは、この前提条件となります。

■著作権を基にしているGNUが、著作物ではないHWに条件を付けるわけが無い

(このバイナリ)プログラムがどのように動作しているか研究し、必要に応じて改造する、のだから

バイナリにアクセスできているのが前提

その前提ならば、その横にソースコードが格納されていて不都合はないはず。

ソース開示していることが分からないのでは？

GNU GPL遵守を**示す**ためにソース開示するのではない

再頒布されるプログラムも**自由ソフトウェアであるように**、GPLで条件付きの再頒布が許諾されている

改変の自由(第一の自由)の対象にアクセスもしない、つまり、**バイナリにアクセスもしない受領者にソース開示していることを示すという条件はGNU GPLにはない。**

※それでも「**見えていなければGPL違反だ**」と言う人はいる。**GNU GPLを正しく理解していない**としか思えないが、**煩わしさを回避するために媒体添付するという選択肢もある。**

古典的なUNIX文化のようにソース頒布を基本に

バイナリ

ソースコード

ビルド

xx.patch

■ソースコードで頒布して、ビルド

■updateもpatchファイルを作成し頒布

■patchコマンドでソース更新しビルド

■updateをpatchファイルで頒布するメリット

- テキスト形式だから、GNU GPLv2第2条の条件を満たせばよい
- ソース開示(GPLv2第3条)を気にしなくてもよい
- バイナリのupdateもOSSのバイナリ形式での頒布で第3条ソース開示が条件
- ソース開示していないことを指摘されたトラブルは少ない

➢トラブルが少ない対策案としてお勧め

バイナリを選択するのなら、理解を高めよう！

著作権を基に理解すれば**GPLの伝播も誤解**とわかる

例えば

ウィキペディアのGPLのライブラリの説明において、何が、間違った言い分が、何が、正しい言い分が、わかる

https://ja.wikipedia.org/wiki/GNU_General_Public_License

ライブラリ

…、次のようないくつかの異なる見解が存在する。

見解1: プロプライエタリ・ソフトウェアを動的リンク、静的リンクすることはGPLに違反する

見解2: プロプライエタリ・ソフトウェアを静的リンクすることはGPLに違反するが、動的リンクに関しては不明瞭

見解3: リンクは無関係である

その解説は有償講義で

GNU GPLの理解を高め、お手伝いします

■OSSライセンスと著作権法 講義 (SH)

第1章 OSSは一般に他人の著作物

第2章 OSSライセンス違反とは

第3章 著作権について

第4章 OSSライセンスの概略

第5章 GPL感染/伝播などの都市伝説について

第6章 基本的な対策例

補遺 GPL3について

補遺 2 体制例

次回、2019年9月3日(火) NEC本社で実施。
詳細は、<https://jpn.nec.com/oss/ossic/> 視聴PDF参照

1人8万円の公開(公募)セミナーの開催も可能
・他社と同席、補遺テキスト無し、短縮4.5H
<https://jpn.nec.com/oss/ossedu.html>

すべてのソース添付できれば、一番簡単！…だが

少なくとも、OSSはすべてソース添付すればOK！

OSS(ex. Samba)

開発アプリ

OSS(ex. Linux)

HW

開発アプリもソース添付できれば話は簡単だが、ソース開示しないで頒布するから、難しくなる。GPLを利用してたら、著作権侵害など

⇒納品物のソースコードからOSSを検出するツールで確認を

OSS検出ツール Black Duck を4F NECでブースで展示

ファイル名しか検出しないツールでは、ソース流用は検出できません。

しかも、GPLのプログラムと一行でも流用したらソース開示は **デマ**。

ツールの検出結果を著作権に基づいて解析できるスキルが必要

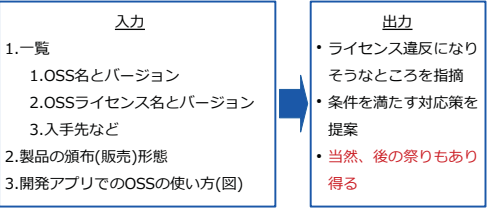
●誰が書いても同じになるコードは著作権性が無い。

●全く一致しても独自に創作したプログラムは著作権侵害にならない

解析支援サービスの活用を

使っているOSSとライセンスは判明した。で、何をすれば？
という、自らの理解が不安な方のために

■製品個別・対策支援アドバイス・サービス



<https://jpn.nec.com/oss/ossic/OSSproduct.html>

